

記してゐる。かれは氷雪の山岳登攀の技術に就いて、最初の研究と發表となしたものである。

なほこの時代に、スイスの博物學者コンラッド・ゲッスナー（一五一六年——一五六五年）があるが、かれはピラトスに登つて、その感想を友に書き送つて曰く「自分は命のある限り、毎年何回か山に登らう。もし幾回もできなければ、少くとも一度は登山をしたい。そして時節は植物の最も發育する夏を選んで、植物の研究を兼ねながら運動と精神の蘇生とを計らうとする。一望の下に巨大なる群山を眺め、雲表に立つことが如何に爽快であらう。自分の魂は、この高所に至つて陶醉と、また最高なる構想をなす。世の哲人は、常にこの樂土に立つて美しきものを眺め、眼と心とを豊かにす

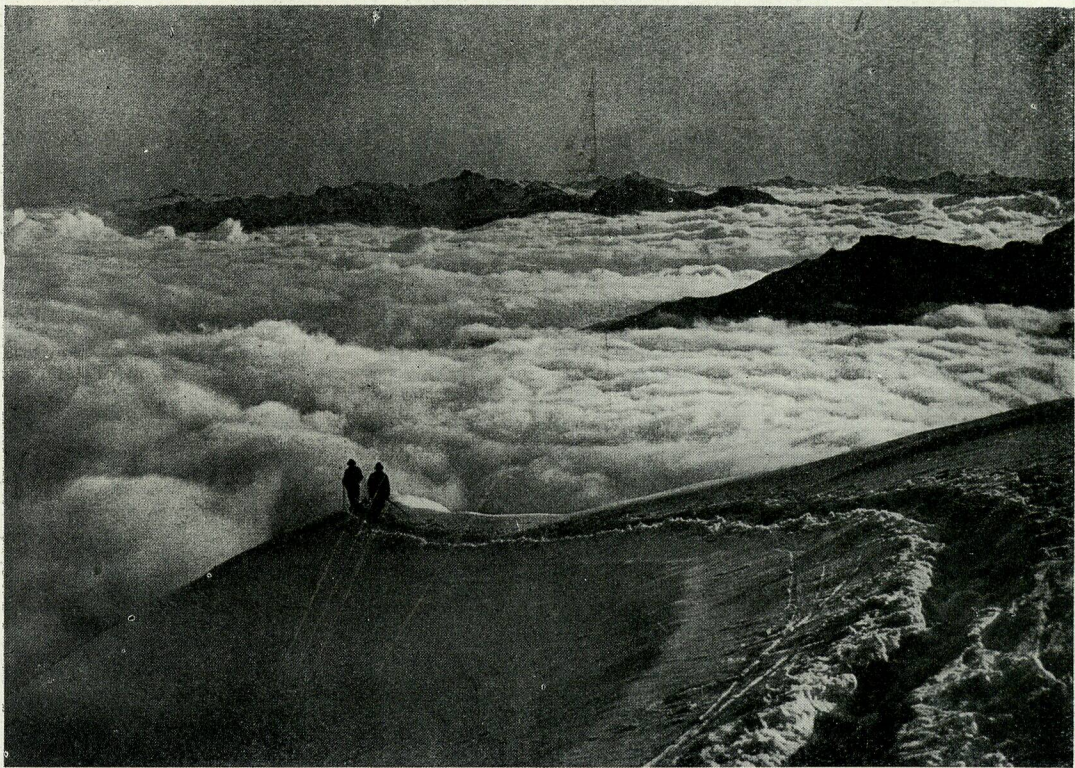


るであらう。望む險岨な峯にも、或は道さへ解らぬ山腹にも、または空に入る大なる山稜にも、または荒寥たる岩石の崩壞にも、晝なほ暗き森の中にも、盡すことのできぬ樂しきは滿ち溢れてゐる」と、記してゐる。かれの感想は、もはや純然たる登山者の立場である。

またゲッスナーほどの登山家ではなかつたがショイヒツ

は上つてあでのもの質性きべるれら飾に頁一第の史山登スプラにもとは圖のつ二のこ び喜の服征  
。るあて畫の時當の攀登初のンラプンモは下。のもたし表をび喜の那刊ため極を頂絶のンルホータツマ

エル(一六七二年——一七三三年)がある。かれは氷河の運動の最初の研究者であり且つ當時世間で信ぜられてゐた、アルプスには龍が住むといふことを丹念に研究しその分類までしてゐる。自然に歸れと叫んだジャン・ジャック・ルソーは、たとへかれ自身は登山家ではなかつたにしても、後來山に入るものの心に育ち行く、アルプスの美の偉大な種を蒔いたものであつた。またゲーテは、一七七五年、一七七九年及び一七九七年の三度に互つて、アルプスを旅行してゐる。グリーンデルヴァルトやラウターブルンネンなどは、皆かれが訪れてゐる。かれ自身もアルプス旅行以來、自然の見方に大なる變化を來したときさへいはれるほどであつて、イタリヤ紀行やファーストの中に現はれてくるアルプスの印象は、こゝに喋々を



朝の山るな大壯、あ。にこどは世の々人きしは顔。ぞくづいは界下。海の雲の空きな音々渺々漠。空のスパアすかるは見々渺々瀟。だのるあに所ふいうかに實は惑魅の山。るみてつま始が餐炊盒飯はで屋小の山。る變と燭え燃と火は波ばれつおに地陽夕。よ。ベタの山よ

要しないであらう。またバイロンも山を人々の中に生かした。もしも、文人、科學者達の間のアルプスの印象を求めて行くならば、限りが無いであらう。たゞこれ等の偉大な人々は、登山家と限つていふ場合には、或はその範圍内に含めることはできぬかも知れないが、これ等の人々の思想は、またアルプス登山者の糧とも光ともなつて、刺戟をし、且つ現代にも働きつゝある。

### 一七六〇年以後

眞に困難な大きな登山の行はれるやうになつたのは、一七六〇年をもつて期限附けることができる。この年にジュネーヴの博物學者ド・ソシルがシャモニを訪れ、モンブラン(四、八〇七メートル)の初登山した者に對し賞を懸けたのである。しかしモンブランは、その後數年間はその切ることができず、一七八六年八月八日に、シャモニ人ジャック・バルマツトは、村醫ミシエル・バカードと共に、この歐洲最高の峯の頂を極めた。次いで翌年ドソシル自身も、バルマツトと共にその頂に達し、これより六日後れて、英人ビュフォイも登つた。ドソシルは、ジュネーヴ大學教授にな



の層上。だ黒つまは姿の山。ぶ飛び噴は波。しらあと風疾。るみてつ狂れ亂くじまきす物くなどんが頭波の雲きなさ重くな音てれ荒が海の山は朝今。海の雲たつ、かひ壟に嶺連のスプルア **頭波の雲るれ怒**  
るあでひ勢なうやるけ抜け断に息一とてへ果らか果の界世てめ掠をたげ類たえばらさせ獲の山は音の風る鳴と々雄。さ早の脚の波雲ぐわさち立。すかや輝射に色銀を頭波の頭とつば々瞬が光の日るれ洩を聞雲

つたが、地質學を修め、一七七六年より一七九二年に亙つて、盛にアルプスを拔擧した。その著書アルプス旅行紀は、歐洲全般に非常の刺戟を與へた。これより登山趣味が勃然として隆盛になつた。殊にこの著書の中のモンブランの地圖は、雪線以上の山岳に關しての最初の詳細なるものである。ドッシユル以後近代的意味の登山が起つたといつても過言ではあるまい。ドッシユルに就いては記述する材料に限りがないが、こゝには現代の人も惱むであらう山の誘惑と妻君の不平との一挿話を傳へる。

かれは始終登山に出かけて不在勝ちなため、留守の妻君から強い抗議が絶えずあつたものとみえる。或る時旅先から妻君に手紙を送つて曰はく、「未だ嘗て訪ねたことのないこの谷に入つて、自分の想像に超えたやうな重要な研究に取掛つてゐる——しかしこんな研究も、お前にとつては何の値打もないことであらう。しかしどうぞかういふのを許して呉れ、坊主みたいにでぶでぶ肥つて、毎日たらふく食つ



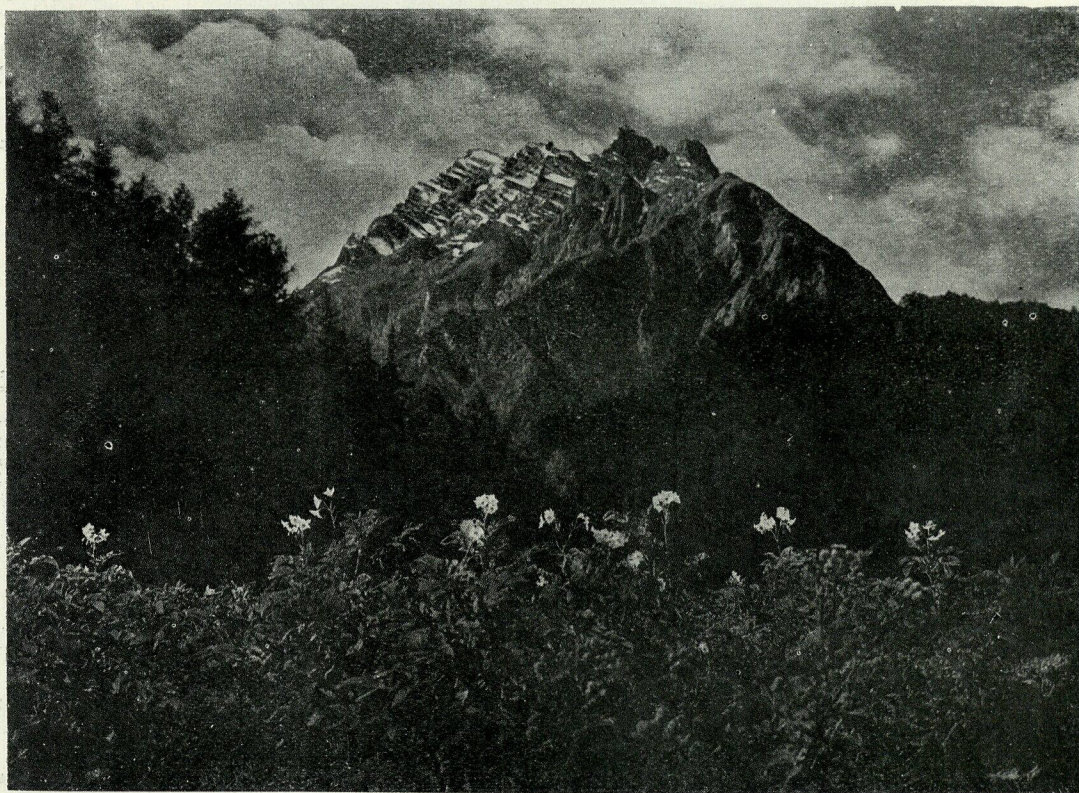
ワルデーエ花名のスプルアラス徴象を白潔と潔純 **スイワ・ルデーエ**か精の姫山  
 ころあひ花いしらほしだん生をスンマロのまごまき來古てしと花の嶺高きな由に探はスイ

たあけく爐邊で薪をかいてゐるよりは、最も貴い研究發見によつて、滅の名譽を得ようと浮身を棄して日に何百斤かの體重が減り、またはお前からは數週間も離れてゐるが、この値打をお前は遠からず認めてくれるだらう。だから假令この旅行がお前に苦痛を與へても、強て續けよう

と自分で誓つてゐる。そしてこの問題について知識を増し、また仕事をできるだけ完成したいと思つてゐる。自分自身に向つていふには、命令一下敵の岩に突貫する士官のやうに、或はまた市場に意氣込んで行く商人のやうに、お前はこの研究のために山に行かねばならない。」と。  
 ドッシユルは、かれを廻つて顯著な山友達の雰圍氣をもつてゐた。例へば、その弟子のスペシヤであるとか、ドリユックであるとか、ブ



やつて「洒落者よ、何が欲しいのか？好きなやうにするがよい。だが、何時かはお前を登つて見せる。」といったほどの元氣者だつた。この山で二晩も暮しての歸途、三人の男が山に水晶探りに入るのに出遭つた。かれは急ぎ村に下り食料を携へ、その後を追つて又山に入つた。三人の水晶探りは間もなく下山して終つたが、バルマットのそば雪中に夜を明し、モンブランの登路の發見に努めた。かれの前には、廣大な雪原が頂上まで續いてゐる。デューマが、當時かれの印象を傳へていふには、「雪崩は不斷に落ちて雷のやうだつた。また氷



クツツ・ピツピ 嶺一のスプルア・スイウス 高さのルトーメハ七一三拔海 花開く草千にはなけた春まいは氣高るがろひに 花のあが熱情い暖るに山な巖峻なうやのものそ志意とる見をのるみてれまく育が花草い優ふうかにかにることふ山山巖るた々峨るあ

河が崩壊するときの響は、ために山が搖ぐかとも思はれた。自分は空腹でもなければ、また渴を覺えもしなかつたが、たゞ激しい頭痛を感じた。霧もか、らず上天氣であつたが、吐く息はハンカチに凍り、衣服は雪のためにすっかり濡れてしまつた。自分は動作を倍にして恐怖の妄念を去らうとしたが、聲は雪の中に消えて反響すらなく、恐ろしさが更に深くなつた」といふ。

この登山によつて、モンブランの頂上に達することのできるのを知つたかれは、單獨でこれを決行しようと考へた。しかし反問してもし單獨で頂上に達したといつても、誰がこれを證明してくれるかといふことを考へ、遂に村醫バカードのみを伴ふことに決心した。

八月七日、二人は村の人に秘してモンブランに向つたが、その夜は雪中に明かし、かれはバカードを「毛布で赤坊のやうに」包んで、寒さを凌いでやつた。翌朝早く再び登り出して、恰も村を望見できる場所に掛つたとき、村の人々が帽子を振つて挨拶をしてゐた。それはバカードが出發の時に、買物をしながら一行の計畫をつい洩らしたので、村の人が知つたのであつた。登るにつれて寒氣はますます加はり、呼吸の困難を感じ、肺臓を失つたのではないかとさへ思つたほどであつたが、そのうちにバカードは全く疲勞しきつたので



の雪残のとも足が。るみてげ上見にげし淋を霏る出き湧に急は人老たれつを羊山。たつたきりぐめが陽の春もに中山のスイウス **れ訪の春**  
。るれは思もにうやるみてれ入を足片に野の春けうを隔れいみ踏を足片に境の冬は人老。るみてつ語をび暮の陽の春は花たみそき咲に中



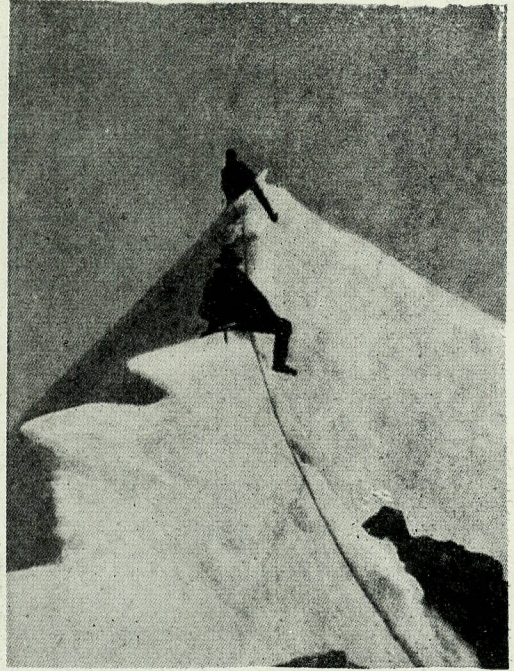


し、東はライン上流の東部アルプスであつたが、第十九世紀に入ると共に、シャモニの中心はスウイスのツェルマットへ、東部アルプスの中心はグリンデル・ヴァルトへと移つて行つた。ツェルマットはヴァ・リスのアルプスの中心で、この小さな村を廻つてヴァイスホルン、ダンブランシユ、マッターホルン、モントローザ、ドーム等、四千メートル級の偉大な連峰が聳立してゐる。またグリンデル・ヴァルトはベルナー・オーバーランドの登山の中心地であつて、フィントールホルン、シュレックホルン、ヴェッターホルン、アイガー、メンヒ、ユングフラウ、アレツチホルン等の高峯群立の地域である。

第十九世紀も後半に入つて、登山は正に黄金時代を現出することになつた。そしておよそ一八四〇年代以後この登山の黄金時代に最



とごの礫 壁山に投げつけられた木の板を足踏として登る。物人なら木の板を足踏として登る。木の板を足踏として登る。



雪峰の脊を渡る。馬の骨より尖つた雪の根尾を歩く。心苦む進んでつ削る雪々々歩。あるで谷の似千は底はれま誤

も活動をして、恰もかれらの獨占舞臺の如く登つた國民は英國人であつた。そしてこの時代の英國人の活動が、第二十世紀に入つても尚ほ英國人をして、遙に他國人を凌駕する地位を與へたものである。

第十九世紀以前の登山は、既に述べ來つたやうに社會一般の傾向を形作つたほどの力のもてではなく、寧ろ何れかといへば自然科學研究の對照としての興味が大であり、また人數においても少いものであつた。しかるに第十九世紀の後半に入つての登山の特色の一つは、何かの研究の目的をもつといふよりは、寧ろより自由な氣持をもつて登山するもの著しく殖えたことである。

未登山の主たる山岳は、次から次へと陸續と登られて行つた。例へば、黄金時代といはれる一八五九年より一八六五年に至る七年間に、およそ百五十を算する主たる山岳が登攀せられた。特殊の少數の科學者等の範圍に止つてゐた登山が一般化したことは、相次いで各國に山岳會が設立せられる時勢となつた。

一八五七年には英國山岳會が、一八六二年にはオーストリア山岳會が、そしてその翌年にはスウイス山岳會及びイタリア山岳會が設立せられ、一八六九年にドイツ山岳會ができた。一八七三年に、このドイツ山岳會とオーストリア山岳會とは合併して、ドイツ・オース

トリヤ山岳會となり、一八七四年にはフランス山岳會が設立せられるに至つた。この時代はアルプス登山史上まことに百花妍を競ふの趣がある。著名の登山者の中に、職業より見るも、學者あり、畫家あり、宗教家あり、商人あり、學生あり、政治家ありといつた風である。



景冬のムラクツナトルハ  
 夏は寒き高山の谷、冬は雪のけの水が凍つて深すな  
 氷の水晶玉に懸るけ。自然の織なり手藝を驚嘆するに値る。

カー、ケネディ、ステイブン、ウイムバー、コンウエー、クーリッジ、ムーア、マンメリー、フレッシファイルド、ノルマンコリー等々、輩出した。向ほスウイス、ドイツ、イタリヤ等にも、ストウデル、デニフォル、アガツシ、フギ・イムゼング、イムフェルド、ジャヴェル、チニデー、ツイグモンデー、セラ・

ジョルダノ等、錚々たる登山家があつた。かくして、一方にまたアルプスに關する著書が溢れるやうに現はれてきた。或はラスキンの如く、登山家とはいひ得ないにしても、山岳の美を傳へ説いて登山をますます深くして行つた人々もある。

こゝに黄金時代と指すものは、未登山の山岳に向つて競ふが如くに登山したことを意味するものであつて、この時代以後はアルプスの登山が衰退することを意味するものではない。却つてこの時代以後は、また新らしき方面の登山が、年を逐うて盛になつた。

黄金時代の終末を告ぐるマッターホルン(四、五〇五メートル)の登山は、山岳そのものの豪壯なる姿や、或はまた久しく登山の不成功であつたことや、且つその初登攀が華々しい仕事であつたと同時に、非常な悲劇を作つたこと等から、最

この時代の研究は頗る廣範圍に互る問題であつて、こゝには數多き登山家中の、優れたる人々の名を記すに止める。

英國人には、フォルベス、ウィルス、タケット、アダムス、レリー、ヒンチクリフ、デント、グリッブル、ボール、ティンダル、マシユウス、ウォル

も著名なる登山の一である。マッターホルンは一八六五年七月十四日に、ウイムバー、ハドソン、ド格拉斯、ハドウの四名の英國人と、クロツツ及びタウグワルダー父子の三人の、ツニルマットの案内人及び荷背負との一行七名によつて初登攀せられた。久しく不可登と考へられてゐたマッター



眞寫。るみてつ巖を妍が花草いしら珍の々歌はに畑花おたべ展を紙代千きし美の面一る見ゞたるところゆ消雲のスブルア **花名の根高**  
かとしすは喜を者山登りかばかへは花のこる誇を命きが短に春の山。姿きやの花の樹高るた々楚。るあで合百タルまるれき出見に中のそは

ホルンは、この一行によつて、その東北の山稜より案外容易に登られたのであつた。しかしこの偉大な成功に燃えての下山の際、七名のうちのバドソン、ドグラス、ハドウ、及びクロツツの四名が、悲惨にも墜死したのである。華々しい喜びと、呪はれたやうな慘劇とのこの登山の模様を、ウイムバー自らによつて傳へよう。

### マッターホルンの初登攀

六月十三日の早朝、ツエルマットを立つた七名の一行は、マッターホルンの中腹約三千メートルの山稜に露營し、翌日は夜の明くるのを待つて再び登攀を續けた。初めの間は割合に容易な登攀が續いて、最後に一箇所難場があるが、それを登り終ると、雪稜が難なく頂上に導いた。かくて一行は、最も難物視されてゐた山岳の頂上に達したのである。

ウイムバーは當時のさまを語つていふには、「クロツツはテントの棒をとつて、積雪の一番高いところに立つてゐた。『旗竿はあるが旗がないぢやないか。』と私等はいつた。『いや、ある。』といつて、かれは上衣を脱いで棒に結んだ。それは貧弱な旗で、風がないので翻りもしなかつたが、しかもあらゆる周囲から仰がれた。ツエルマットからも、リフェルからも、そしてイタ

リヤの谷からも……その日は恐ろしく静かな、澄み切つた日であつた。そしてそれは常に、悪い天氣に先立つて来るやうな日であつた。大氣は全く静止して、片雲も無ければ、靄も見えなかつた。峯々が一〇、否二〇キロも離れてゐながら、鋭く明瞭に見えた。それ等の山岳の微細な點



までも——山稜も斷崖も雪も氷河も、閑なく明確に現はれた。過去の幸ひな日の楽しい思ひ出が、このふるい友だちの姿を見渡して、限りなく湧いて來た……。そこには最も峻々たる姿、最も豐滿な線、それから勇敢な直截的な斷

崖、または寛やかに波打つ斜面があつた。岩の山、雪の崖、暗黒なもの、壯嚴なもの、或は輝くもの、純白なものがみな絶壁塔、尖塔、ピラミッド、圓頂堂、圓錐、そして鋭い錐等の形をなして立つた。そこには、この世に求め得らるべきすべての組合せと、想像のできる限りのすべての

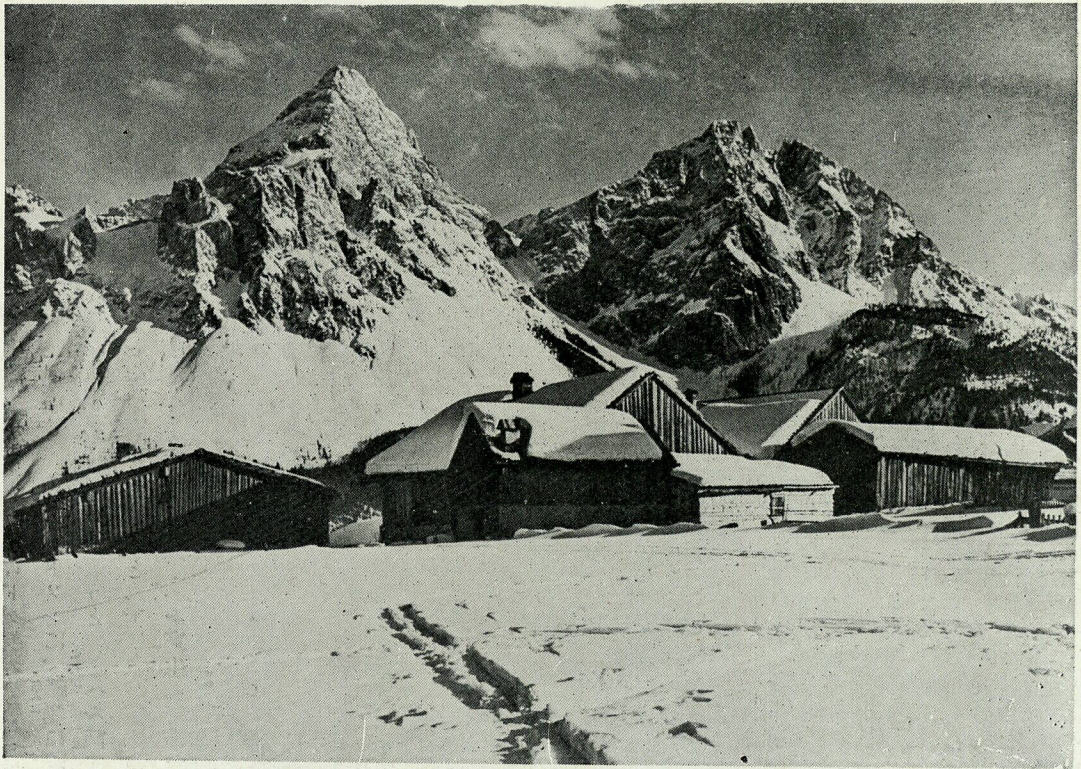
シイブらち流れ流らかナルホルアルペオのルトーメニ四六三抜海 河水ルエシーフ  
。さし美るせは想を河銀ふいとるあに國の空は勢流のそるた然察々洋 。ちあて觀壯の河水ルエ



等は、補助繩を岩に結んでも  
るす、且つそのことに就いて  
は何もいへなかつた……。

しばらくの後、ツエルマットの  
のホテルモンドローザの眼の  
利く子供が、主人のザイラー  
のところへ飛んで来て、マッ  
ターホルンの頂から、マッ  
ター氷河に雪崩が落ちたのを見  
たと語つた。が、子供が何か  
たわいもないことをいつてる  
と考へられた。だがかれは  
正しかつた。そして、このこ  
とを見たのであつた……。

クロツツはアックスを側にお  
いて、ハドゥに充分な安全を  
與へるために、かれの兩足を  
とつて、一足づつ、適當な場所  
へおいてゐた。私の知つてゐ  
る限りでは、誰もその時は  
下つてゐなかつた。先きの二  
人は岩角に限りられて、一部  
分しか見えなかつたので、確  
かとはいひ難いが、私はかう  
考へる。それはかれ等の肩の  
動作から察して、クロツツは前  
に述べたやうな行動をし終つ

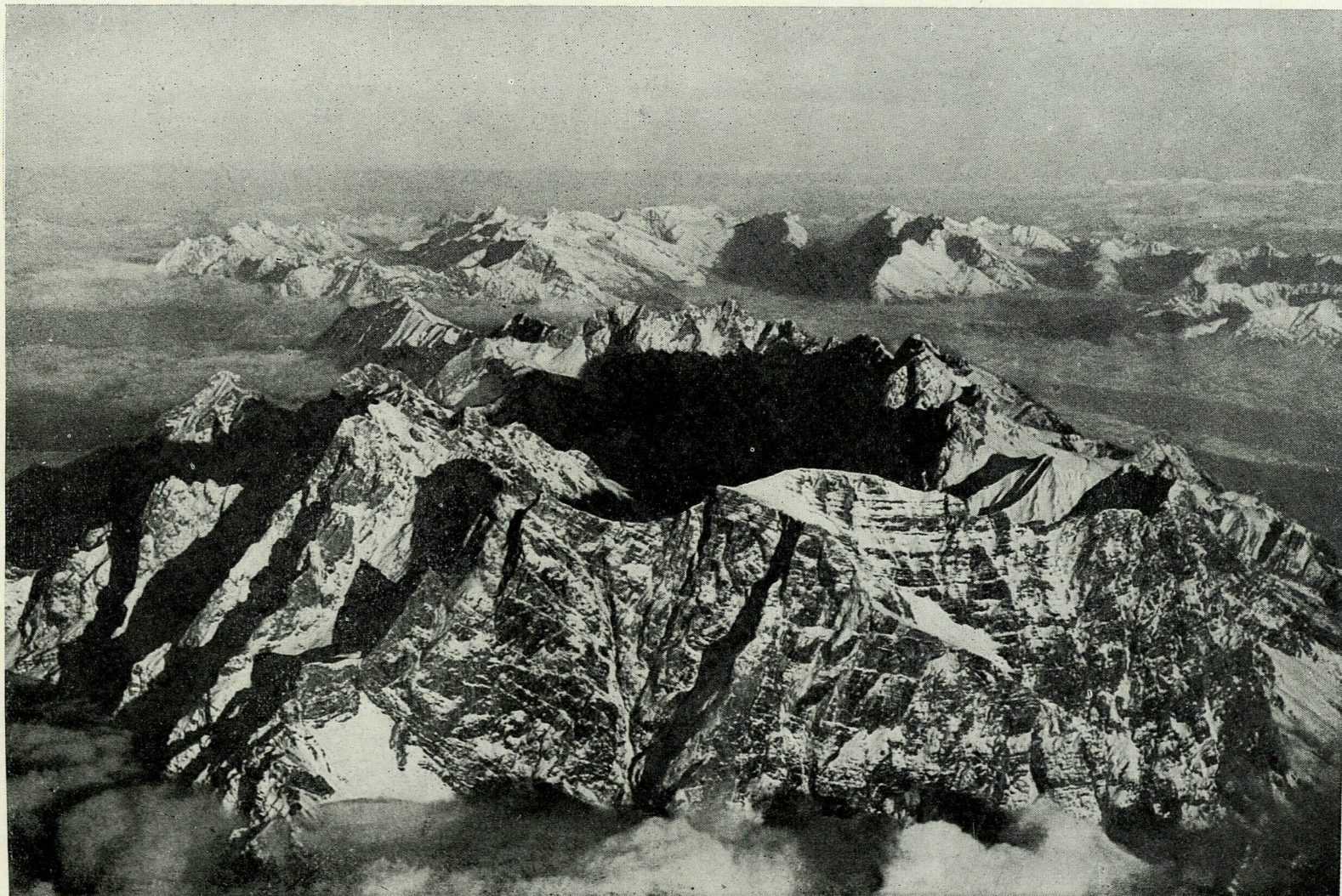


— タベムアヴとエツツピスンネンゾ —  
— タベムアヴとエツツピスンネンゾ —  
。ろみてへ溝を氣山な微冷にか靜は景雪のスムーズル。るあで峯高のルトーメ〇四五二は者後。ルトーメ四一四二は者前。るあで峯峻の

て、今度は自分が下りるために體を廻  
はしてゐた時らしい。ハドゥは滑つた、  
そしてかれの上に落ち懸つて飛ばした  
私はクロツツの驚愕の叫びを聞いた。  
そしてかれとハドゥが、飛ぶやうに落  
ちて行くのを見た。次の瞬間に、ハド  
ソンはかれの足場を失つて引落されド  
グラスも續いて落ちて行く。このすべ  
てのでき事は瞬間の事であつて、クロ  
ツツの叫び聲を聞くや否や、老ビーター  
と私とは、岩が許す限り固く自身等を  
支へた。二人の間の繩は張つてゐたの  
で、打撃は一人に來るやうに思へた。し  
かし繩は、タウグワルダとドグラス  
との間で切れた。数分の間私等は、不  
幸な友が仰向けなつたまま、手を延ばし  
て、どうかして助からんものと務めて  
滑り落ちて行くのを見た。

かれ等は怪我もせず一人一人と私  
等の眼界から去つて、崖から崖へと下  
のマッターホルン氷河まで、殆ど一千  
二百メートルの高さを落ちて行つた。  
繩の切れた瞬間から、かれ等を救ふこ  
とは不可能であつた……。

さて、マッターホルンの傳統的な不  
可登高は征服せられた。そしてもつと  
眞實な性質の物語に代へられた。



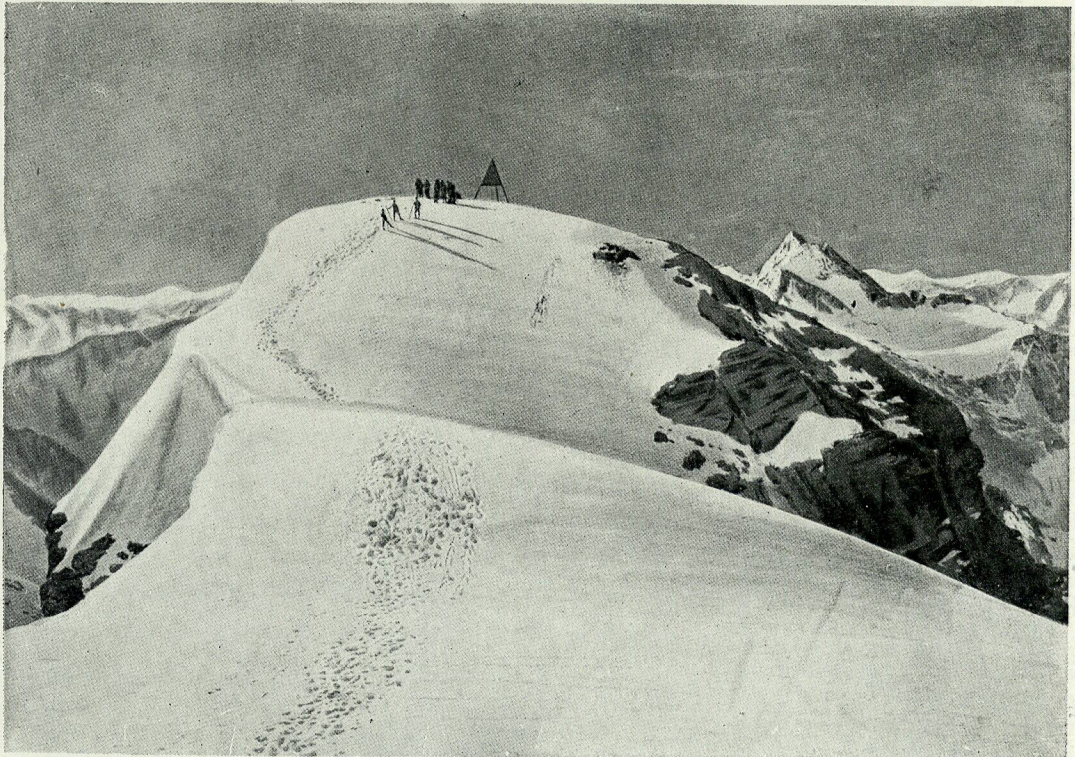
レデルホフは峯の山のこゝいなるてつ距りきあとンルホツレシはンルホータツェヴ嶺秀な名有も最のスプルア・ズーネルベいにトリアガルデンリグ **ルデンエヴルカとンルホータツェヴ**  
るるで観大のルデンエヴルカよ波に海雲と峯同は眞寫。るるでれ分に峯三の (ルトーメ三九六三) ンルホンゼーロと (ルトーメ〇一七三) ンルホルテ ッミと (ルトーメ五〇七三) ンルホータツェヴ

他のものはその誇れる断崖を計るに、いと易きを覺ゆるであらう。しかしその山が、初めの登山者に對する如くには、何人に對してもあり得ない。他のものはその頂の雪を踏みにちるであらう。しかしその壯大なる展望を、初めて見詰めたものの感を知るものはなからう。そしてまた——私はさう希ふのであるが、何人も喜びが悲しみに、笑ひが悔みに變つた話を強いられるものもなからう。

その山は手強い敵であつた。それは長い間抵抗した。そして數多くの強い打撃を與へた。しかし遂に敗られた。しかも何人も想像しなかつたほど易々と破られた。だがそれは執念の敵の如くに——征服はせられたが、粉碎せられることはなく、恐るべき復讐をなした。マッターホルンが消え失せる時も來よう。さうして形なき岩石片の一塊のみが、嘗てこの大いなる山の立つてゐた地點を示す時が來よう。何となれば、一分子からまた一分子と、一ミリからまた一ミリと、そして一メートルからまた一メートルと崩して行く力に抗し得るものは、何物もないからである。その時は遠達だ。そして今からさへ、來るべき幾時代幾世紀と、その恐ろしげな断崖を仰いで、その堅剛なる姿に驚くであらう。そしてかれ等が如何に想像を高くもたうとも、或は如何に豫期を誇張しようとも、決して失望して歸るものはないであらう……と、述べてゐる。

### 近時の登山

このマッターホルンの慘事は、非常の驚愕を與へたのみならず、勃興しつゝあつた登山に、大なる打撃を與へたのであつた。黄金時代とまで呼ばれるほど盛にせられてゐた登山が、この年のでき事以來目立つて減少してきた。そしてまた熱心な登山家達は、登山をするにも人目に立たないやうに山に入ることまで、しなければならぬやうな世間になつたのであつた。こんな状態が五年も續いて、その間に取り残された高峯は、比較的少數の人々の恣にするところとなつてゐる。



でロキ六約東南のグルベルゲンエは峯スリトイテ峯峻一のオブルア・フイウスに屬に縣ンルベ。ンデルヴァルテンウ 嶺絶のスリトテ  
。ろあで名有でのふいとるあでさし美の一第パッローヨは望眺の頂山のこたまで山るれら登くよは山のこ。ろアルトーメ九三二三抜海





喜びの者服征 苦難歩攀ややくやくに危き切抜けた々峻絶の嶽をききためは登者の心そにけふものなる物にきき  
 快あひ強ひばれ征服者の喜びとともいふべきかき汗濡たれりクリクサを卸ルケッ山嶽立に互ひに友助を合ふ。

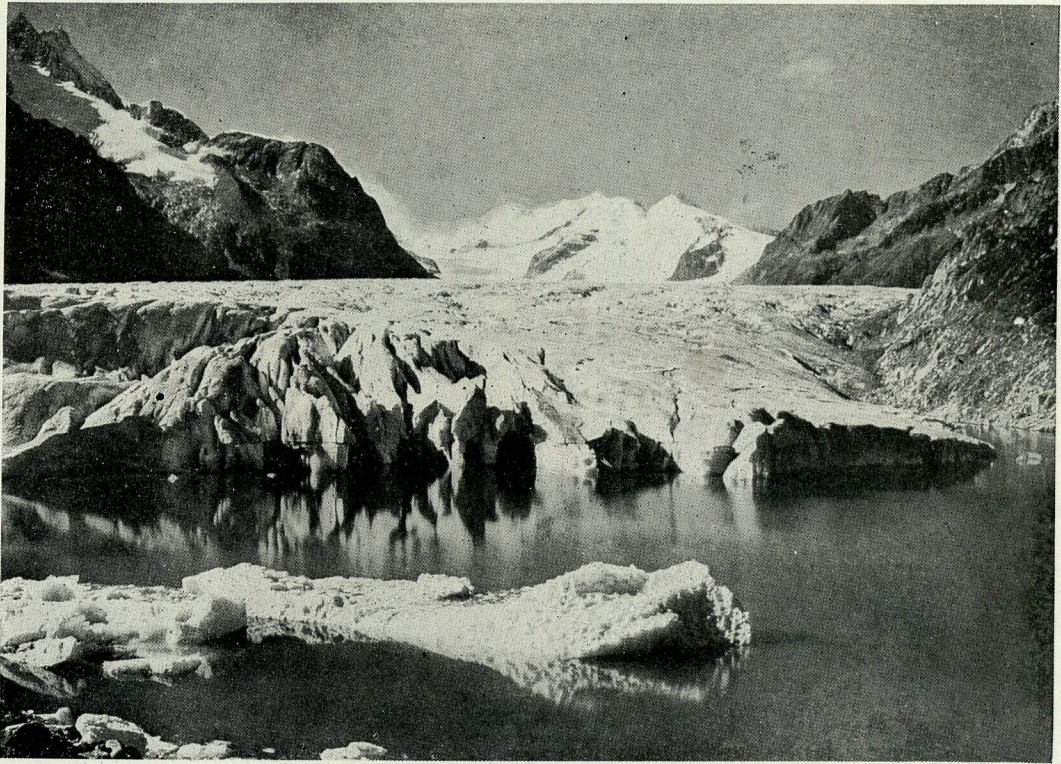
この反動的な沈静な時も次第に再び甦つて。一八六九年にドイツ山岳會の設立の頃より、再び登山熱が盛り返してきた。そして一八七二年にテラー及びベンドルビユ兄弟との三人が、マクニヤガの谷よりモントロザを登攀した。この登山は今まで未登攀の山岳を漁つてゐた傾向が、かゝる山岳が盡きて次第に行詰らうとしてゐた登山界に、新しい生命を與へたものであつた。同じ山岳にしても、別の登路によつて新らしく登攀するといふ風が生じて來たのである。また一八七四年の冬に、ユングフラウとゼエターホルンが征服され、これまでは夏季のみであつた登山が冬にも眼を向けてくるようになった。この冬の兩登山には、クーリッジの叔母なる人も同行してゐた。婦人の登山はやく育ちかけたところであつたが、これがこの方面に大なる刺戟を與へたものである。かうして、一度マツタホルンの慘劇によつて打撃を受けた登山界は再び復活して、爾來いよく盛大なる登山になる一途を辿つた。たゞ一八七〇年代より甦生したこの盛大なる登山熱は、一面に登山より起る犠牲者の數をも、次第に増加して行つた。そしてその増加は高峯を登攀する人數の増加よりも大であつた。このことは一方に登山技術案内書、山小屋の設備、地圖等の完成を、非常に促した。またこの時代に最も活躍した登山家達は、前述の諸山岳會の錚々たる連中であつた。たゞこれ等の山岳會のうち、英國山岳會のみは會員たるべき資格に、非常の嚴格な資格を必要としたが、他のものは極めて一般的な嗜好の上に、多數の會員を有して發達した。

登山熱が次第に復活して以來現はれた特色の一つは、登山家達は一季節に一の登山中心地點を求めて爲すといふ風である。これに比して以前の人人は何れかといへば、一季節内にも峯より峯へ、峠より峠へと、旅を續けるものの方が多かつた。この二つの明確な特色が、後年に至つてまた混合するやうになつた。

また他の特色は、岩登りが盛になつたことであつて、殊にドロミテ邊りが盛に登られ、遂には小さな岩塊までも登り盡されるやうになつたことで

ある。氷雪の山稜に登るよりは、この方面が一時一般人にとつての流行と化したのであつた。しかしこの流行の極端は、登山をして一半をのみ知らしむることになる。アルプスは常に氷雪に蔽はれた山脈であるので、氷雪の技術と岩登りの技術との両方面を體得してなければならぬからである。そしてまたこの岩登りの流行はアルプスの困難な山岳に経験等の資格の不充分な人々を驅つて、案内なしの登山をなすやうな傾向をも作つた。尤も充分の経験を有するものの案内なしの登山は、論を俟たず望ましきことではあるが、謂はゆる暴虎憑河の勇に逸つた登山者の數を増したことは拒むことができない。

充分な資格ある人々の案内なしの登山は決して新奇なことではなく、一八五五年にハドソン及びケネディ



アとウラフグンユルにあに面東のスプルア。ゼーネルべてしと主で河水の大最スイウスは河水チッレア湖レゼルメと河水チッレア  
ろ。でろことろるてし下流に湖レゼルメが河水同は眞寫。るあでのるみてれ流に間峽のロキ〇二約き長。るみてあでで雪のとシルホチッレ

の一行が既にモンブランに登つてゐるほか、尙ほ實例は多く存してゐる。案内なしの登山の最も悲惨な例は、一八八五年にメイジニにおけるツイグモンディの死であらう。

一方交通機關ホテル等の設備の發達は短期間の間に忙しい登山をなすものが増した。この傾向は、また不注意をして最も大切な思慮を欠いた人々の登山をも増さしめ、同時に不幸なる山の慘事が一段と多くなつてきたのである。

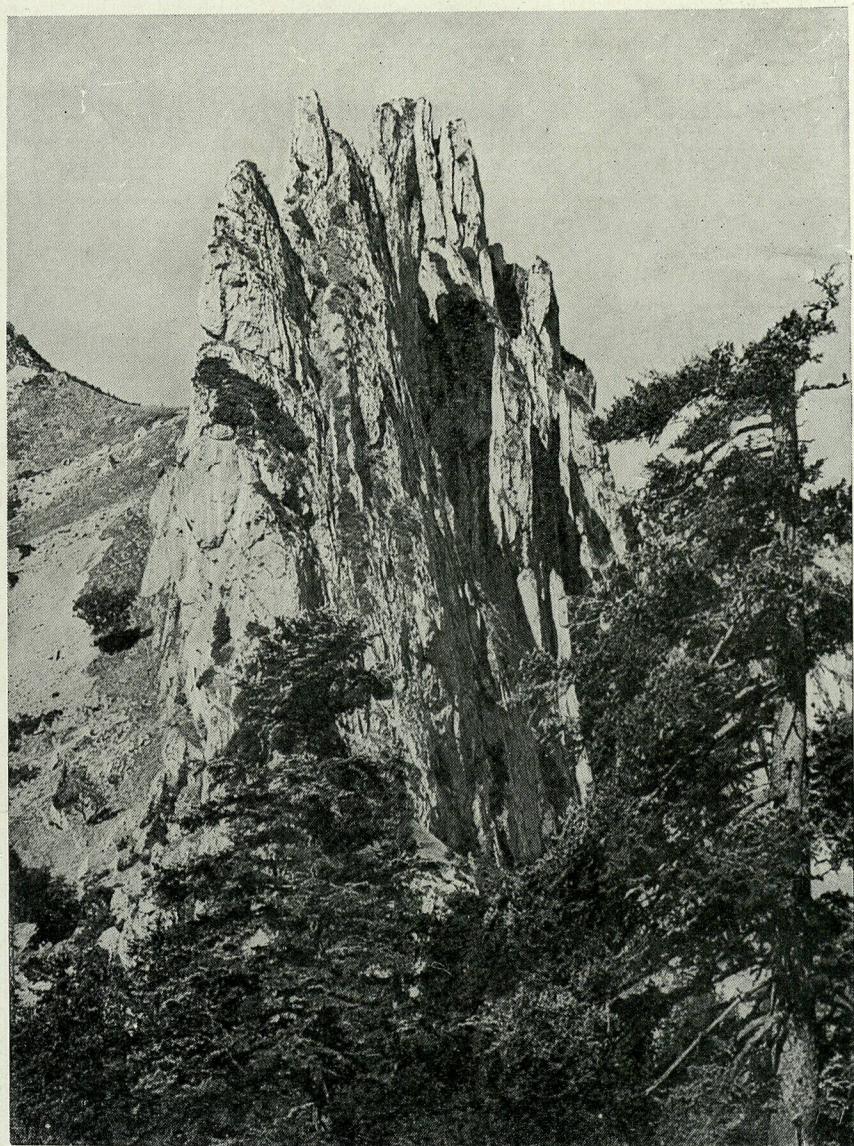
歐洲大戦によつて一時中絶してゐた登山はまたこの數年來非常な勢をもつて復活してきた。それは恰もフランス革命によりて一時中絶した場合のそれとは、比較にならぬほどの盛大なものになつてきた。登山者の種類も、頗る複雑になつて來てゐる。そしてイギリス、ドイツ、フランス、イタリヤ、スウイス、オーストリヤ等の人々のみならず、オランダ、ベルギー、アメリカ等より登山のために集つて來る、たゞ雑然としてあらゆる種類の人々よりなるが故に、その最も高き程度の知識経験をもち眞摯なる登山家より、僥倖によつて僅に克ち得た登攀に誇りを感じるやうな無謀なる人に至るまでの、優劣の差も次第に大きくなりつゝある。



りでん並相にたなき深雲。るあで峯群のドンヴァルテイハイな得をるはば叫を哉快ずは思ていつりどたらがなき喘 **峯つ四む望に透**  
 。るあで姿るな大雄の「峯の雲」だん響らかエツピスルテツイウ・ルゼーロムナは眞寫。るあで峯高のルトーメ〇〇六さ高は峯のつ四る



マー九七一) ルデンシと(ルトーメ二九一二)トルエフソグ大見らか根尾のエツピスルエウルアのルトーメー一八一抜海 **スプルアの雪**  
 。るあで必要が鏡眼色でのるめ筋を目は射反のそとるす射直にれこが光日。るあで姿の淨清切一目満てれ埋に雪はスプルア々皚白(ルトー



巖奇のニイタステンケラブ  
突に樹連スプルアるれはいと根屋の界世。ルトーメ四六七一抜海るす立屹  
。だ親壯の種一は巖奇る見に間の杉古たしお苔。るあで勝奇なう々の義妙がわはニイタステンケラブ巖奇るす出

### 登山案内者

最後にこの項を結ぶに當り、山案内人について一言したい。山案内人は登山の發達の初期から既に存在してゐた。或る山について經驗または知識をもつものが、登山者に從ひ案内者として備はれたことは自然である。しかしかゝる案内人は、現在の謂はゆる山案内人として認むるものと

そして山案内人たるには、能力及び行動の範圍等について、一定の資格試験を経なければならぬやうになつた。この組合組織以前の山案内人の錚々たる者には、シャモニのバルマツト、ツエルマツト方面にクロツ兄弟、カレル、マイリンゲン地方にバンホルファ、アンデレック、ウエレン等あり、グリンデルヴァルトにパウマン、ウィットウエル、ブローイエル、ブルグナー、ボーレン、アルマー等、ラウターブルンオンにはラウエネル、

は選庭がある。これ等の案内人達は平常他に本職業を有し、たまたま山に案内する範圍であつたのが、次第にこれ等の人々の中から山に案内することをもつて職業となすものができた。例へば前に述べたドソシユルがモンブランの登路の發見者に賞を懸けたことによつて、バルマツトなる山案内人が現はれたやうなものである。そしてドソシユルは、バルマツト及び他の案内人を、シャモニの谷のみならずグリンデルヴァルト及びツエルマツト方面の登山にまで、同伴したのであつた。その後次第に登山者の増加すると共に、職業的山案内人の數も増し、一八二二年頃には既にシャモニには、素人より分離獨立した職業的山案内人の組合までできた。ベルナー・オーバーランドには一八五六年に組合ができた。